

---

# ラブ・ラブ・ラブ！

久芳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブ・ラブ・ラブ！

### 【Nコード】

N6588H

### 【作者名】

久芳

### 【あらすじ】

好きになっただけに告白する。そんなあたしが放課後に告白しようとした日高くんは、人の顔を見るなり「告白するなら断る」と言っただけで帰ろうとする。あたしはあわてて、その背中を追いかけた…。

「告白するなら断るからな」

あたしの顔を見るなりそう言い放って、日高くんはくりと背を向けた。

自転車置き場から自分の自転車を出して、彼はそのまま帰ろうとする。呆然とするあたしに視線もくれず、ケータイを見る余裕までみせて、今まさにうら若い乙女をふったなんて思えないぐらい堂々としていた。

「な……」

かあつと、自分の顔が熱くなるのがわかる。告白する前に玉砕するなんてまったく考えていなかったことで、恥ずかしいやら悲しいやらで頭の中がいつぱいになってしまった。

「ちよつと、待ってよ！」

彼が自転車に乗ったら最後、あたしの一大決心はぶつかる前に碎けて散ってしまう。それだけは避けたくて、あたしは日高くんのお尻に思いつきり蹴りをいれていた。

背後を襲うという卑怯な手に、日高くんは「いつてえ！」と悲鳴をあげる。自転車もろともすっころんでしまえと思ったのだけど、悔しくも彼はハンドルを離すことさえしなかった。

「人の話は最後まで聞いてよ！」

日高くん、話があるの。放課後の自転車置き場でそう女子が話しかけてきたら、普通男子はだまって聞くものだろうに。なのに彼ときたら、あたしの話なんて聞かずに返したのがあの言葉だ。

「誰も告白しようなんて思っていないわよ！」

耳まで真っ赤になったあたしの虚勢なんて、見抜かれてるに決まってる。日高くんはお尻をさすりながら、薄い唇の端を上げてニヒルな笑みを浮かべた。

「違った？」

「違うもん！ うぬぼれないでよ！」

叫ぶ声が甲高くなる。きーきーうるさい小猿でも見るかのような目であたしを見下ろし、日高くんは「そう」と謝りもしなかった。

「じゃあ、なにさ？」

「それは……」

とつさに言葉が出てこない。顔の火照りが強くなって、あたしの耳からは煙が出ているのではないかと思うくらいだった。

「用がないなら帰るけど」

「そんな、ひどい！」

自転車を押してすたすたと歩き始めた日高くんを、あたしはあわてて追いかける。青々と茂った校庭の桜の木が、風にふかれてあたしたちに緑の雨を降らせていた。

「だってお前、帰る道俺と違うじゃん」

日高くんもまだ、自転車に乗って逃げるほど白状ではないらしい。こちらを振り向き、あたしが追いかけてくるのを見て苦笑していた。あたしは日高くんの、こういうところが好きだった。

結局日高くんは、あたしがずっとついてきても何も言わなかった。何も言わないというか、あたしがいることを気にしていないという感じ。違いすぎる歩幅を懸命に合わせて隣に並んでも、空気のように流されて、気まずさを通り越していつそすがすがしい。

日高昌樹。彼はあたしが高校生になっではじめて、告白しようと決意したクラスメイトだった。

席も近くてよく話をして、お互いのメアドだって知ってる仲で。

漫画やCDの貸し借りだつてして、今日だつてあたしが貸した少女  
漫画に「面白かった」って感想までつけて返してくれたのに。まさ  
か告白しようとしてあっさりはねのけられようとは思わなかった。

行く道を見据えたままの日高くんの目に、あたしの姿が入ることはめったにない。たしかにあたしの背は小さいけれど、短くてくるくるのクセ毛頭が仔犬っぽいと可愛がられて今までやってきた。視界の端でちょこちょこ動いていたら、すこしぐらい見てくれたっていいのに。

「国崎さ、中学のときに告白したやつのこと、覚えてるか？」  
ふいに話しかけられて、ぼんやりと見上げていた日高くんがこつちを見た。その涼しげなまなざしとぼつちりあって、あたしの小さな胸が見事に打ち抜かれる。

どきん、と心が鳴る。

「中学のときっていうと……高野くん？」

「違う」

「じゃあ、市川くん？」

「違う」

「松下くんのこと言ってる？ それとも遠藤くん？ まさか大滝先生じゃないよね？」

「……どれも違う」

はあ、とため息をついて、日高くんは目をそらした。横顔だとより際立つすつとした鼻筋が、ぺたんこのあたしとは大違いだった。

「ミヤモトってやつに告ったことないか？」

「あるけど……？」

ふたつ上だった宮元先輩のことか、それとも同級生の宮本くんのことか。あたしが訊く前に、日高くんが「同じ年のほう」とつけくわえた。

「あれさ、俺のいとこなんだ」

「そうなの？ あんま似てないんだね」

中二の秋に告白した宮本くん。仔リスみたいに大きな瞳といい、

あたしが告白したときには『ごめんね』と優しく断ってくれたこと  
といい、日高くんとはとても似ていなかった。

へえーとのんきに感心するあたしに、彼はばりばりと頭をかきむ  
しる。そして再びこっちを向いたその眉間には、かすかにしわが寄  
っていた。

「俺さ、そのいところから話聞いてんだよ。国崎が中学のとき、片っ  
端から男に告白してたって」

「片っ端じゃないもん、そんな見境いないみたいに言わないでよ」

「お前はそう思っても、まわりではそう言われてるんだ。すこし  
自覚しろよ」

やけに説教くさい口調で、日高くんが言う。あいかわらず歩くの  
が早くて、自転車もからからと軽快に音を鳴らしながら引かれてい  
た。

「前の中学じゃ、かなり有名だったんだろ？ 国崎七恵はミーハー  
で男好きだって聞いた。話をした男子には三日以内に告白するって」

「まあ……あながち嘘じゃないけど」

ミーハーで男好きは多少脚色されてはいるけれど、たしかにあた  
しは惚れっぽかった。

同級生から学校の先生まで、好きになったら自分から言った。小  
中で告白した回数は、両手に足の指をいれても足りそうにない。

先生にはもちろんフラれたけど、OKをもらって男子と付き合っ  
たことだってある。あたしの低い背や子供っぽさが、小動物的で男  
子受けがいいようだった。

「付き合っても、もって一ヶ月だって」

「……まあ、長続きはしないけど」

続いて、せいぜい一ヶ月。朝に下駄箱の前で告白して、放課後に  
校門の前で別れたことが何度もある。

「たしかにここの高校は国崎のいた中学とは離れてるけど、噂が広  
がるのは早いんだ。俺がいとこから聞いた話は別に誰にも言ってい  
けど、似たような話、みんな知ってる」

言って、日高くんがちらりとあたしを見る。目があつてすかさず微笑んでみたけれど、彼は笑うどころか眉間のしわをさらに深くした。

「すこし危機感もてよ」

「なんで？」

「なんでって……」

はあ、とまたため息。けれど信号が赤に変わると、気づかずすすもうとしたあたしの首根っこをつかんでちゃんと教えてくれた。

「男好きだつて有名になつて、嫌じゃないのか？」

「まあ、嬉しくはないけど」

「そもそも否定しないのかよ」

「だって、本当のことあるんだもん」

噂が広がるのが、思っていたより早かったけれど。

「別に、それはただの噂であつて事実じゃないでしょ。信じるも信じないもその人の自由だし、こっちがくよくよしてたらよけい本当っぽくなるじゃん」

「……そうくるか」

日高くんが肩を落とした。

「あのさ、国崎」

「なあに？」

「国崎がその噂についてどう思うかはかわないけど、その噂を聞いた人がどう思うか、もうすこし考えたほうがいいぞ」

神妙にひそめられた声が風に流されるので、あたしはちゃんと聞き取るうと耳を近づける。すると日高くんはぎょつとして離れた：

…これじゃ小声での会話は無理だ。

「男つてのは、恋愛感情がなくても平気で動けるもんなんだよ。ただでさえ盛りのついた高校生が、男遊びしてるって噂の女子を知ったら、それを信じて身体目当てで寄ってくる。そういう目にあって傷つくのは、他でもない国崎自身なんだぞ？」

信号が変わって、日高くんは再び歩き始める。先ほどと違って、その歩調は心なしかあたしに合わせてくれているようだった。

「もし国崎がそれでもいいって言うなら、俺は引き下がるしかないけど。でも、俺はそういうの、見たくないから」

ちらりと、ようやく日高くんの視線が戻る。それはいつもと違ってすこし弱々しくて、あたしの出方をうかがっているにも思えた。

「……なんか言え」

「言えってそんな、命令的な」

たしかにあたしは口を出さなかったけど、別に日高くんの言っていることに腹が立ったわけじゃない。むしろ彼があたしのことを気にかけているということに気づいて、いつもうつとおしがられていると思うていたぶんよけいに、驚きが強かった。

どきん、と心が鳴る。

「やっぱりあたし、日高くんのこと……」

「言うな」

ぱかんと頭を叩かれて、あたしは舌を噛みそうになる。なにするのよと抗議しようとしたら、「なに考えてんだばか」と怒られた。

「人が真剣に話してんのに、どうしてそういう流れにもってこうとするんだよ」

「痛いいたい！ わかったあたしが悪かったよごめんー！」

耳をぐいぐい引つ張られて、あたしは悲鳴をあげてあやまる。周囲の視線が集まる前に、日高くんはあっさりとあたしを解放した。

「……ありがとう、日高くん」

痛みの残る耳をさすると、まだそこには日高くんの手の感触と、指先のあたたかさが残っている。それを感じながら、あたしはぽそりと呟いた。

ちよつとばつが悪い。でも、言ってくれた日高くんだっていろいろ覚悟があつたに違いない。あたしがもう一度ありがとうと言っても、彼は「別に」とぶっきらばうだった。

「それでね、日高くん。あたしやっぱり あっ！」

あたしがなにを言おうとしたか察したのか、日高くんは颯爽と自転車に飛び乗り、力強くペダルをこいだ。

「ちよつと、待ってよ！」

あわてて、あたしも後を追う。自転車の速さにはとうてい追いつけないと思つたけど、去つてゆく背中ではさほど小さくならなかった。決して全力でこぎだそうとしない日高くん、やっぱり、あたしの心はどきんと鳴った。

「俺、国崎の『好き』っていうのがよくわからないんだよね……」

車どおりの多い国道から、川沿いの砂利道に入ったところで、日高くんが言った。

結局さほど自転車には乗らず、またからからと押して歩いている。さも当たり前のようにあたしのカバンをかごに入れてくれて、ぼんやりと河川敷で遊ぶ子供たちを眺めていた。

「今まで告つた相手は、どういうところが好きだったんだ？」

「どういうところ……？」

その質問に、あたしは答えられなかった。

「考えたことなかった。好きって思つたら、もう好きになつてたか

ら」

「どういつきつけ？」

「重い荷物持ってくれたとか、黒板で届かないところ消してくれたとか、かな？ あと、体育で走ってるの見たり……普通に話してた時とか。うつかり手がぶつかったとか、目があったとか？」

指折り数えるあたしを、日高くんがしげしげと見つめてくる。歌が上手だった、眼鏡姿がかっこよかった、頭をなでてくれたと続けたところで、「それぐらいいい」とさえぎられた。

「そういうのが積み重なって好きになるのか？」

「違うよ。それで好きになるの」

「じゃあそれがきっかけで、どんどん好きになると？」

「？ 好きだから、好きって言うんだけど」

しばらく、沈黙が流れた。

日高くんはあたしを見つめたまま、前も確認せずに歩き続ける。大きな石にハンドルをとられてよろけたけど、それでも視線は決して離れなかった。

「……つまり、国崎は、好きだと思ったらずくに言うのか」

「うん、だいたい」

好きになると、胸のあたりがぽつと熱くなる。どきん、と心が鳴れば、あたしはその人のことを好きになっていた。

「お前のそれは……違う『好き』じゃないのか？」

「好きは好きじゃないの？」

「いや、だから……」

なんと言おうか考えて、日高くんはようやく目をそらした。あまりに長いこと見つめられていたので、あたしはすこしほっとする。また顔が赤くなりかけていた。

「国崎の好きは、俺が保健の先生がしゃがんだときに、タイトスカートがピチピチになるのを見たときと一緒にだと思う」

「なっ……あたしそんな変態じゃない！」

「違うって、俺はそういうことを言ってるんじゃないって！」

変態と大声で言われたことに、日高くんは傷ついたようだ。顔を真っ赤にして、ぱかんといつもより強くあたしの頭を叩いた。

「じゃあ、日高くんは保健の先生のことが好きなの？」

「違うって」

頭を振って、日高くんはまた考える。ぶつぶつと口の中でなにとか呟いて、あたしに言う順序を決めているようだった。

「……国崎の告白は、一瞬のときめきをそのまま口にしたものなんだと思う。どきんとしてそれを好きだと思って突っ走るから、すぐに飽きて違うやつに惹かれるんだ」

形のいい眉をくいつと上げて、日高くんはあたしに問う。ずばり見事に、彼はあたしのいつものパターンを見抜いていた。

「そりゃたしかに、好きっていう感覚は人それぞれだと思うけど……でも俺は、国崎の好きはどうも、違うように思うんだよな」

「……じゃあ日高くんは、どんな感じで人を好きになるの？ 先生の色っぽいところ見ても好きにならないってことは、子供っぽい人のほうが好きなの？」

「いや、そういうわけでも」

また、ぽりぽりと頭をかく。それが日高くんのくせで、あたしは髪がこすれて流れてくる彼の香りを密かに気に入っていた。

「俺は、あまりタイプがはっきりしてないからな。いつの間にか相手のことをよく考えるようになって、あいつとああいうことができたらとか、こんな話ができたらとか一人で考えるようになってたら、もうそいつのこと好きになってる感じ」

「それでその子に好きって言っの？」

「俺はチキンだから、そうそう簡単に相手に好きとか言えないんだよ。本当に好きになったやつには、言いたくてもものどにつつかえて出てこないことのほうが多いんだ」

自分の恋愛を話すのは恥ずかしいようで、日高くんの頬はすこし赤らんでいる。またちらちらとこっちに視線をやって、目が合うとすぐにそらした。

「……訊くけど」

「うん？」

「国崎、好きになった相手と、キスとかできるのか？」

「えっ……」

返事に詰まるあたしに、日高くんはさらに続けた。

「付き合っただとしてさ。キスしたりセックスしたりとか、考えたかな？」

「それは……でも……しなくたって別に、好き同士ならいいんじゃないの？」

ちよっぴりお堅いイメージのあった日高くんが、そんなこと言うとは思わなかった。あたしのどきまぎが伝わったのか、日高くんもちよっと気まずそうだ。

「お互い好き同士で、気持ちで満足してても、やっぱり自然とそう

いう流れになる時だってあるんだ。俺は国崎が、そういうことを考えずにただ好きって言ってるように思えるんだよね」

「それは……」

たしかにあたっていた。

あたしのファーストキスはとくに済ませてある。中一のときの彼はあたしの告白をあっさりとOKして、何度かデートを重ねて、相手からキスしてきた。

あたしはそのとき、何かが違うと思った。相手のことが好きじゃないと思った。だから、その後も続かず別れてしまった。

結局いつも、キスまでだった。手を握る前に別れてしまうことのほうが多い。相手から去られることもあったけど、だいたいはこちらから切り出すことのほうが多かったわけで。

「たしかにさ、俺たちも年頃だから、エロいことばかり考えたりする。でも、相手はやっぱり好きな相手がいって思ってるやつのほうが多いと思う。その好きって言うのも、それこそ相手の色っぽいところ見たから、っていう理由ではないんだよ」

女子はどうか知らないけどさ。そう付け加えて、日高くんは唇を閉ざした。

あたしは、好きと言って、ありがとうと受け入れてもらえればそれで満足だった。その後のことなんてほとんど考えてなかった。

玉碎覚悟。あたって砕ける。そういう意思で向かって行ったこと自体、あまり相手の気持ちを考えていなかったのだと思う。

「国崎はすこし、気持ちを抑えてみるといいと思うんだよな。高校でも中学の時みたいに誰彼かまわず好き好きやってたら、女子たちに目つけられてもおかしくないんだぞ？」

「……でもあたし、今回半年我慢したよ？」

意外そうに、日高くんが眉をあげた。

そう。今回のあたしは、告白するのを待った。

日高くんのことが好きだと思っても、すぐに突進しなかった。すこし慎重になろうと思って、時間をあげようと努力したのだ。

日高くんが、あたしの中学時代をどこまで知っているかはわからない。はたして宮本くんは、あたしと女子とのバトルを見て、だからこそ日高くんに国崎七恵は気をつけると言っただろうか。

日高くんの指摘はもう起こっていた。あたしは中学のとき、女子とひと悶着も二悶着も起こしていた。その理由は何を隠そう、あたしの恋愛行動についてだった。

誰かと付き合って、一週間もしないうちに他の誰かのところに行く。誰がその男子に片思いしていたかなんて気にしなかった。そういうことを繰り返していくうちに、女子からは冷めた目で見られるようになり、友達にですら仲間にいれてもらえなくなった。

高校を中学の同級生たちが行かないところを選んだのだって、新しい男を捜すためだと言われていた。

言われてみればそうかもしれない。でもあたしは、高校で変わる

うと思っていた。

あのころのように、自分の思うままにするんじゃないくて。気持ちを抑えて、おさえて、おさえて、そして言おうと決めていた。

だから今回も。高校で最初に隣の席になった日高くんは、好きだと言っのに時間を空けたのだけど。

「その半年の間に、他のやつのこと好きになつたりしなかつたか？」  
「それは……」

否定しきれない自分が悔しい。

たしかにあたしは、この半年で日高くん以外の人も好きになつた。化学の先生とか、生徒会長とか、後ろの席の男子とか。でも、ほんと心が鳴ることがあつても、それが長く続くことはなかつた。

何度も心が鳴るのは日高くんだけだつた。

一見ぶつきらばうで冷たくて、むかつとさせられることのほうが多いけれど、ふとしたときに見せる思いやりに心を打ち抜かれてばかりだつた。

「言っのをただ我慢するだけじゃ、なにも変わらないと思う。結局告白すれば、国崎はすぐに飽きるんじゃないのか？」

それは、自分にもわからない。なにせあたしはまだ、日高くんに自分の気持ちを伝えていないのだから。

日高くんが好きだと言つて……彼はまだ言わせてくれないけれど、言つたとして。日高くんがあたしの気持ちを受け入れてくれるかまづわからない。

もし、受け入れてもらえたら。あたしはそれで満足して、また他の男子に目移りしてしまうんだろうか？

「国崎はまず、ちゃんと好きな人を見つけたほうがいいと思う」  
それきり、日高くんは何も言わなくなつた。

あたしも何も言えず、ただ、隣を歩き続けた。

「結局、家までついてくるんだもんな」

はあ、とため息をついて、日高くんは家の前で足を止めた。

日高くんの家は高校に近い。徒歩でもじゅうぶん通える距離なのだから、自転車ならもっと早いに違いない。毎朝早起きして、朝食もそこそこに満員電車に乗り込むあたしとは、まるで生活が違っていた。

「ついてきたのはいいけど、国崎、帰り道ちゃんとわかってるのか？」

「まあ……たぶん」

日高くんばかり見ていて、道順を気にしていなかったとは……言えない。恋は盲目といえど、ここまでなにも見ずに知らないところを歩いた自分に、自分で驚いてしまう。

呆れる日高くんの顔を見て、あたしは今さらながら、この猪突猛進な性格に恥ずかしさがこみ上げてきた。

「ごめんね、なんか家までついてきちゃって。じゃあ、また明日ね」

end

道に迷ったら最悪、タクシーでもなんでも使えばいい。そう思っ  
て自転車のかごからカバンを出そうと伸ばした手を、日高くんがし  
つかとつかんだ。

「駅まで送る」

「いいよ、そんな。せつかく日高くん、家に帰ったのに……」

無理にカバンを取ろうとすると、強い力で押し戻される。そして  
日高くんは自転車にまたがってくるりと方向転換したかと思うと、  
おもむろに後ろを指差した。

「乗って。荷台ないけど、立つところわかるだろ？」

「だから、あたし歩いて帰るってば」

「俺ん家の近くで国崎がうろついてたって噂になったら嫌なんだよ」  
てつきり優しさだと思ったら、違った。あたしはむっとして、無  
言で自転車にまたがる。

「ちゃんとつかまってるか？」

「……うん」

肩に手を乗せると、日高くんは首が弱いのか「もうちよつと外側  
にして」とくすぐったがる。顔は見えないけどそのしぐさが可愛く  
て、あたしは素直に手の位置を変えた。

「じゃ、行くぞ。足まきこまれんなよ」

「わかった」

日高くんはよろめくことなく、すんなりと自転車をこぎ出した。

「国崎ん家、帰るの遅くなっても大丈夫なのか？」

「うん、全然ヘーキ」

日高くんはまた、川沿いの道を走った。

気づけば、夕暮れになっていた。まだ空の端に暗さはないけれど、  
太陽は茜色に変わっている。川の流れも水面の反射も、すべてが燃  
えるように赤く色づいている。

いつもは隣か正面で話していたから、こうして日高くんの後ろ姿をまじまじと見るのは初めてだった。風になびく短い髪から、ちらちらと耳がのぞいている。肩に手を乗せてみて、あらためて広い背中をしているのだと気づいた。

行きと違って、帰りは本当に会話がな。またあたしは空気のようになっているかと思うけど、日高くんはあたしを送るために自転車に乗っている。それがなんだか嬉しかった。

日高くんのこういうところが好きだった。

ぶっくらばうで、冷たくて、でも実は優しいところ。あたしは何度、それで心が鳴ったかわからない。

結局今日の会話だって、ただ単にあたしを注意していたわけじゃない。あたしのことを心配して、考えながら喋ってくれた。言葉は冷たいけど、そのふしぶしに、あたしは日高くんの優しさを感じていた。

日高くんのことをいつ好きになったのか。考えてみたらそれはよくわからない。隣の席でかつこいいなとは思ってたけど、それはまだ好き、ではなかった。

少しずつ話すようになって、あたしはいつもどきつとしてばかりで、でもすぐには言わないようにと心にストッパーをかけていた。でも今、こうして日高くんの後ろにいたら、抑えもなにもきかなくなってしまう。

「言うなよ」

ねえ、と口を開きかけたとき。日高くんが言った。

「絶対、今は言うなよ」

決してこっちは見ない。あたしは日高くんの頭ばかり見ているけど、その声は風に乗ってよく聞こえた。

「でもあたし、やっぱり……」

「言うなっば」

ふりむいてきつと睨み、日高くんはまた向き直る。彼がこっちを見ているのを見事にいいことに、あたしはぶつと頬を膨らませた。

断るつもりでも、せめて言わせてくれてもいいだろうに。

「……二年になってクラスが違っても、気持ちが変わらなかったら、言っていい」

「え？」

声が小さくて、よく聞こえなかった。でも日高くんは確かに、そう言っただ。

あいかわらずこっちを見ない。あたしが身を乗り出して見ようとすると、意地になって顔をそむける。バランスを崩しかけて自転車がふらついて、日高くんは舌打ちしながら元に戻した。

そんな背中に、あたしは訊いてみた。

「……どうして日高くんは、あたしにここまで言ってくれるの？」  
噂とか、まわりの反応とか、あたしの考え方とか。そんなの無視していいものなのに、なんで日高くんは、あたしに言ってくれるのだろう。

その答えを、日高くんはすぐに返さなかった。

しばらく川の流れを眺めて、時間をやり過ごしてから、おもむろに口を開いた。

「俺も、案外惚れっぽいんだよ」

日高くんはそれだけ言っただけ、また無言になってしまふ。

もくもくと自転車をこぎ続ける彼の、その見え隠れする耳が赤くなっているのを、あたしは見逃さなかった。

「日高くん、もしかして」

「言っただ」

「日高くん、あたしね」

「言っただっ！」

急にスピードをあげられて、あたしは悲鳴をあげてその背中にしがみついた。

くっつけた頬から、日高くんの体温を感じる。彼の早い鼓動と、鳴り響くあたしの心が溶け合っただけ聞こえてくる。

そっただ、背中に唇を寄せても、日高くんは気づかなかった。

かつてないくらい大きな『好き』を、あたしは今、日高くんに感じていた。

E  
N  
D

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6588h/>

---

ラブ・ラブ・ラブ！

2010年10月8日14時59分発行